

コーディネーターとしての事業に対する意見シート

■事業名：青少年健全育成協働・連携促進事業

■コーディネーター氏名・所属：浦田宗昭・いせ市民活動センター

■ふりかえり会議開催年月日：平成 17年 3月25日

1. 協働のプロセスについて意見

この事業は、平成11年度の「三重県青少年健全育成ビジョン」に基づき行われた公募事業の2次募集にNPOが応募し選定されたことから始まる。事業名からも分かるように、最初から協働・連携促進事業として位置づけられた事業である。中間期のふりかえり会議の時点では、行政もNPO側が実施能力の高いNPOであると認識しており、お互いに話し合いをする等して、良好な関係を作りつつあった。行政もNPO側も中間期の振り返り会議の後、両者の間で話し合いがもたれたのが信頼関係の形成、協働・連携促進に結びついたと思われる。また、この事業を管轄する行政職員の資質による効果も見受けられる。

NPO側は、行政の関わり方に不満はあるものの、自立した実施能力のある組織であるため、役割分担は行政による資金の提供、NPO側の自主的な運営の判断で円滑に行われていったようである。

ただ、NPO間の協働・連携促進では課題が残った。このあたりは、行政がもう少し現場に入り、コーディネーター的な役割をする必要があったのかもしれない。

2. 成果についての意見

行政もNPO側も成果については納得している。中間期の振り返り会議以降、円滑な関係性が保たれ、成果にも影響を与えたものと思われる。集計の結果は、サンプル数が少ないとは言え、今後のNPO側の事業の推進に役立つものとなると思われる。また、行政にとってはNPOを知る機会となり、NPO側にとっては行政を理解するきっかけとなったと考えられる。

3. 課題・改善の整理とまとめ

NPO側には、組織の未成熟さという課題がある。行政にはネットワークを作る意識がやや低かったところが課題である。両者がお互いの課題を補い合える関係性を事業をはじめる前に作っておくことができればよかったように感じられた。NPOが陥りやすい問題、行政が陥りやすい問題、いつも同じとは限らないが、今回の事業で両者がいい実績を積むことができたと思う。

4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

NPO 側からお茶やお菓子が出され、和やかな雰囲気の中で行われた。厳しい話題を話しながらでも笑いが出て和やかな雰囲気になったのは、お茶やお菓子があったことが大きい。今後のふりかえり会議でもこのような配慮をコーディネートする側が行う必要があるように感じられた。

また、ふりかえり会議で話し合われた事業ではないが、MIE チャイルドラインセンターそのものの事業を推進していく上で、今回の事業は行政と NPO 双方にとって大変貴重な経験になったと考える。NPO 側は、多くの部署と関わらなければいけないし、多くの NPO も巻き込まないと実現できない事業である。また、資金の獲得という大きな課題もある。MIE チャイルドラインセンターそのものの事業の実現化は、NPO だけで行えば途方もない時間がかかってしまう。行政との協働で行われることで、より効率的かつ迅速に事業が行われると考えられる。より質の高い事業とするには、行政のコーディネート能力が必要となると思われる。また、今後 NPO 自身が、「組織としての基礎体力(ヒトを育て、モノを創り、カネを集める力)」をつけることと「喜びを創る出す気持ち」を忘れないでもらいたい。

コーディネーターとしての事業に対する意見シート

■ 事業名： 「三重県青少年健全育成協働・連携促進事業」

■ コーディネーター氏名： 安村 富子

(みえ市民活動ボランティアセンター 市民プロデューサー)

■ ふりかえり会議開催年月日： 平成 17 年 3 月 25 日 (金)

1. 協働のプロセスについて

三重県青少年健全育成協働・連携促進事業は、平成 14 年度より 3 ヶ年に及ぶものであり、16 年度は、子どもの心を受け止める 24 時間フリーダイヤル相談電話設立に向けて段階的試行を通じて NPO、企業、行政各団体の協働連携を促進していくものである。行政側としては、こうした事業を行政単独で行うには無理があり、公開ワーキングで参加者、MIE チャイルドラインセンターと協議しながら進めていくこと、NPO 側もネットワークの部分で連携を強めていくことで、双方の想いは一致していた。しかし、複数の行政が関わる事により、青少年室の立ち場所が難しくなったようである。コーディネーターは NPO 室なのか青少年室なのか。こうした問題についてもっと話し合いがされても良かったのではないかと。やがて、行政同士の連携、青少年と MIE チャイルドラインの連携も薄くなっていったが、最終的にはお互いに理解し合えてよかった。行政組織の難しさなども理解しお互いに歩み寄ることができた。NPO 同士、チャイルドライン内にも葛藤があった。ただ公開ワーキングへの行政の出席が少なくなり、不満も聞かれたがワーキングの性質上やむ終えない部分もあった。

事業委託者（行政側）は、少なくともアストで開催される会議、及び 24 時間フリーダイヤル相談が、とても困難を伴うものであっただけに実際の事業を覗くべきであった。

2 成果について

事業後の満足度について「わからない」としたのは、「資源提供者」というあいまいな表現や、しなければならぬと思わせる表現に戸惑ったことが伺えた。しかし、地域での人々の育ちやネットワークの広がり実感できた。この事業がメディアで紹介され、講演会も関心を集める事ができたが、何よりも協働をより進めたというインパクトが大きな成果であると、双方が認めている。

3 課題 改善のまとめ

協働の満足度は、「わからない」となっているのも十分という表現にこだわった結果であり、チェックリスト自体を理解する難しさも指摘された。古くて新しい問題であるが、協働のコスト分担については、特に NPO 側の労力、人件費の問題がある。今回もやはり NPO の高いミッションに、「おんぶに抱っこ」という委託事業の一面を見た。これが

改善されない限り、行政と NPO の協働事業における NPO 側の負担感は払拭されないのではないか。

4 事業全体についての意見・感想

今回は、事業中間期でのふりかえり会議の重要性を強く認識できた。中間期では、当事者同士の危機感と意欲が必ずしも共有されてなかったとある。その想いをお互いにぶつける会議を持った事で、その後はより協働が身近なものになり、NPO としてもアドバイスを受けながら、行政と一緒に成し遂げたという意識を持てたようだ。個人的な信頼関係もしっかりと築かれている様子が伺え、非常に和やかな実りあるふりかえりができた事を付け加えたい。